品種分類に映し出される人びとと植物との関わり

ーエチオピア西南部の農耕民マロの事例からー

藤 本 武*

Human-plant Relationships Reflected in the Folk Classifications
of Cultivated Plant Varieties among the Malo,
Southwestern Ethiopia

Takeshi Fujimoto*

This study describes the folk classifications of cultivated plant varieties among the Malo with special reference to their classifications of *boyna*, taro [*Colocasia esculenta* (L.) Schott] and *uitsa*, enset [*Ensete ventricosum* (Welw.) Cheesman.].

The Malo, one of the Omotic-speaking agricultural peoples, live in the steep mountainous area of Southwestern Ethiopia, whose elevations range from 600m to 3,400m above the sea level. Their population is about 70,000.

The people cultivate about eighty kinds of plants, and give them vernacular names almost in accordance to taxonomic species. However, this classification differs from the botanical taxonomy because it is basically a practical classification based on the way they cultivate and utilize. Thus, I call these vernacular names 'folk species'.

They recognize varieties among the twenty-three folk species which most of the people cultivate. In particular, they recognize a number of varieties among the root and cereal crops which are important staple foods. Furthermore, they classify several major varieties of taro and enset into 'sub-varieties' according to the slight differences in color of the petiole or pseudostem. Therefore, there is a tendency for the plants which most of the people cultivate and value highly to be classified in detail.

It may be partly due to their interests which vary with the degree of each plant's importance to them. But from my observation in the fields, those plants that are classified in detail exhibit great variation in morphology and color. Then it seems quite natural for them to be classified into such large numbers.

Such great variation among cultivated plants is now considered to have been formed in the interactive processes between the human and the plants. I think, in the processes, the selection has been for those plants that are valued highly and paid much attention to. It is indicated by the Malo behavior to their cultivated plants that they add into their varieties' inventory what are considered new to them. In this light, the Malo folk classifications of cultivated plants is thought to be understood as suggesting such selection processes and reflecting the interactive relationships between the people and the plants.

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

はじめに

エチオピア西南部の山岳地帯に暮らすマロ (Malo) は、オモ系言語を話す人口約7万人の民族集団で、斜面を利用した農耕によって主な生業を営む人びとである。彼らは80種近い植物を栽培し、その約1/3のものについては品種を識別している。本稿は、彼らの栽培植物の分類、とりわけタロイモとエンセーテという2つのイモ類の品種分類を、その実際の利用法ならびに彼らの価値づけという文脈を通してとらえていこうとするものである。

マロの人びとは自らの栽培する植物に対してそのひとつひとつに名称を与え、栽培および利用と関わる名称区分体系をもっている。彼らのなかで多くの人が栽培する植物には品種が識別され、なかでも食糧源として重要な穀類とイモ類には多数の品種が認められている。このうち、タロイモとエンセーテという2つのイモ類では品種が多数区別されるばかりでなく、それらの一部の品種ではその内部でさらに名称によって類別されている。人びとが高い評価を与えているものほど、また実際に多くの人によって栽培されているものほど、多数に分類され、分類のレベルも深くまで掘り下げられるかたちとなっているのである¹⁾。つまり一見したところ、彼らの分類は重要な対象ほどより精緻な分類がなされているようなかたちになっているのである。それは何よりも彼らの関心の度合いを示した結果であるようにみえる。しかしはたしてそれだけなのだろうか。

筆者が彼らの栽培する植物を見ながら感じたのは、彼らが精緻な分類体系を発達させている植物ほど、あたかもそうした分類体系を人びとに誘導するかのような多様な形態的変異が実際に存在しているということであった。

この植物にみられる多様性は、人びとと関わりなく無前提に存在するものというべきではあるまい。むしろ重田 (1995) のいうように²⁾、人びとと植物との密接でかつ相互的な関わりを通じて生成・増大してきたものと考えられる。つまり、両者の長期におよぶ相互的な関わりが栽培植物の中に刻まれそして結晶化してきたものとして、その現在

の形態的多様性は理解されるべきものであろう。

そうであるならば、マロの人びとのもつ分類体系は、彼らの関心の一方的な反映というわけではあるまい。またその逆に植物の形態の差異をただ受動的に受け入れたものというものでもあるまい。むしろ、人びとと植物との相互的な関わりの中から創出されてきた多様性を映し出したひとつの鏡としてとらえられるものなのではないだろうか。本稿は、彼らのタロイモとエンセーテの品種分類の事例の分析などを通じて、これらを示すことをめざすものである。

1 調査対象および調査方法

1.1 調査地の自然環境

本稿で調査の対象としたマロ (Malo) の人びとは、エチオピア南部州 (Southern Nations, Nationalities and Peoples' Region)、北オモ地区 (Semen Omo Zone)、マロ・コザ郡 (Malo Koza Woreda) におもに居住している。一帯はエチオピア北部から続くアビシニア高原の南端付近にあたり、急峻な山岳地帯となっている (図1)。海拔高度にして約600mから約3,400mまでと、大きな高度幅がみられる。そのため気温、降水量とも、域内でも場所により大きく異なっているが、全体としては年平均気温20℃前後、年間降水量1,500mm前後と推測される³⁾。季節は12月から2月までが乾季で、それ以外の時期が雨季である。雨季のなかでも特に6月から8月までは、1日中雲に覆われて日射がほとんどなく、そのため気温も日中でも20℃あまりまでしか上昇しない肌寒い日々が続くというきわだった特徴がある。植生は本来アフリカ山岳降雨林 (Afremontane rain forest) とされる (Friis 1992)。しかし、土地の大半を占める山の斜面は現在もっぱら耕地として利用されており、森林は稜線付近や川筋、急傾斜地などにわずかに残されているだけである。

1.2 マロの概略

マロについての人類学的な調査研究はこれまでおこなわれてきていない⁴⁾。彼らはアフロ・アジア語族のオモ (Omo) 系オメト (Ometo) 方言の1

図1 調査地とその周辺地域

言語であるマロ語を母語とする民族集団である。実際には、彼らは東南に隣接するゴファ (Gofa) の母語であるゴファ語も話すことができ、日常的にゴファ語を用いている人も相当数にのぼっている。マロの現在の人口は七万人ほどと推測される⁵⁾。

生業は、自給自足的な農耕と家畜飼養、および季節的な蜂蜜採集からなる。そのうち家畜は、財としての価値はきわめて大きいものの、それらが屠られるのは1年に数回のみであり、日常的に得られる乳製品も成員1人あたりにすればごく少量である。乾季に採集される蜂蜜も通常貴重な現金収入源として市場へ売りに出される。そのため、彼らの日常の食材料は、自ら耕作して得た作物

がほとんどすべてを占めている。ただしのちに述べるように、そこで栽培される植物はヴァラエティーに富んだものとなっている。

エチオピア西南部の農耕民社会の多くは複数の社会集団が階層的に積み重なったかたちで形成されている。マロもその例外でなく、ゴカ (Gok'a), ドコ (Doko), オタ・マニ (Ota Mani), ギタ・マニ (Gita Mani) の4つの集団よりなっている⁶⁾。これらはみな父系的なクランよりなり、婚姻に際しては夫方居住をおこなう。伝統的には一夫多妻制であったが、この30年間に浸透したプロテスタント系ミッションのキリスト教の影響で、現在では一夫一妻が大半を占めている。

1.3 調査方法

筆者は1994年1月から1995年2月までの間、2つの集落を数週間ごとに往復するかたちで現地調査をおこなった。その2つの集落とは、高度約2,000mから3,000mにかけての高地に位置する人口約2,000人の大集落ガイツァ (Gaytsa) と、高度約1,500mから1,900mに位置し、人口300人前後の比較的小規模な集落シャーシャ (Shaasha) である。両集落は徒歩で4～5時間の距離にある。

調査は特定の助手を設けないかたちでおこなった。用いた言語は、1991年の政変前までエチオピアの公用語であったアムハラ語ではじめ、マロ語の習得とともに徐々にマロ語に切り替えていった。

2 マロの栽培植物の分類

2.1 マロの栽培植物の特徴

調査をおこなったガイツァおよびシャーシャで観察された栽培植物を表1に示した⁷⁾。その数は80種類あまりにものぼっている。それらの栽培起源は世界各地におよんでおり、マロの人びとがそのような多様な起源・由来をもつものを柔軟に取り込んでできていることがわかる。

そうしたなかでとくに興味深いのは、食糧源として重要な穀類およびイモ類がそれぞれ10種類近くもあることである⁸⁾。人びとは主食作物として特定の栽培植物に依存するのではなく、多様な栽培植物を大きな変異の存在する生態環境にあわせて巧みに選択してきていることをうかがわせる。主要な栽培植物の農耕暦を図2に示した。

2.2 栽培植物の民俗分類

2.2.1 実用分類としての民俗種

こうした多種多様な栽培植物をマロの人びとはどのように分類・命名しているのだろうか。もっとも基本的な枠組みとして想定しうるのは、人びとが栽培をおこなう上で区別しているまとまりである。これを本稿では「民俗種」(folk species) とよぶことにする⁹⁾。異なる民俗種のものどうしが区別されぬまま、播種や収穫などを同時期に同所的におこなわれることはないということである。

この民俗種はすべての栽培植物に対して個別にかつ網羅的に名称が与えられており¹⁰⁾、その80%以上 (64/77) のものは他の意味領域で用いられることのない固有で単独の語彙素によって構成されている。こうしたことから、民俗種は栽培植物の分類においてもっとも基本的な分類の枠組みを提供しているといっていいただろう。

この民俗種が植物学的な種 (species) とほぼ1対1に対応していることは表1から明らかである。つまり、マロの人びとによる民俗種と植物学における種の分類とはパラレルなものとして対比しうると考えられる。しかしよくみると、学名で一種のものに対して複数の民俗種が区別されていたり、その逆のケースなど、いくつかの相違も存在する。そうした植物学的な種の区分とのずれに着目することで、民俗種という分類のもつ本来的な性格がより浮かび上がってくるように思われる。すなわち、純粹に形態に依拠した分類といえる植物学の分類に対し、民俗種の分類はそこに人びとの利用法や関与の仕方が大いに投影された分類となっているのである。

例えば学名で *Hordeum vulgare* L. と一種にまとめられるオオムギは、マロでは *bang'a* (カワオオムギ) および *murk'a* (ハダカオオムギ) の2つの民俗種に分けられている。カワオオムギは脱穀を完全におこなうのが難しいのに対し、ハダカオオムギは容易であるという性質の違いから、両者では加工・調理の仕方が異なっている。しかし、穂を外から眺めている限り両者はよく似ており、いったんそれらが混ざってしまうと分離するのは彼らでも容易ではない。そのため、人びとは両者が混ざるのを強く嫌い、最初から別の栽培植物として区別して栽培している。名称もそうした区別にしがたい、別個に与えられている。

コムギ属 *Triticum* の栽培植物については、マロでは *T. aestivum* L. (パンコムギ)、*T. durum* Desf. (マカロニコムギ)、*T. turgidum* L. (リベットコムギ)、*T. dicoccum* Schubl. (エンマーコムギ) の4種がある¹¹⁾。このうち前の3種は *giste* と一括して呼ばれ、そのなかで品種分類がおこなわれている。一方、エンマーコムギのみは *giste* に含めら

表1 マロの栽培植物植物

	和名	方名(「民俗種名」) (マロ語)	学名	栽培起源地	栽培頻度* (Gaytsa)	栽培頻度* (Shaasha)	栽培地**	品種数***
穀類	オオムギ(カウムギ)	bang'a	<i>Hordeum vulgare</i> L.	西南アジア	8	5	BC	9
	オオムギ(ハダカムギ)	murk'a			4	0	BC	(13)
	バンコムギ	giste	<i>Triticum aestivum</i> L.	西南アジア	9	3	BC	15
	マカロニコムギ		<i>Triticum durum</i> Desf.	西南アジア				
	リベットコムギ		<i>Triticum turgidum</i> L.	西南アジア				
	エンマーコムギ	k'anbara	<i>Triticum dicoccum</i> Schubl.	西南アジア	5	0	BC	2
	トウモロコシ	badala	<i>Zea mays</i> L.	中央アメリカ	3	9	BC	4
	モロコシ	daats'a/baha****	<i>Sorghum bicolor</i> (L.) Moench	熱帯アフリカ	6	10	BC	10
イモ類	テフ	gaashe	<i>Eragrostis tef</i> (Zucc.)Trott.	エチオピア	0	11	BC	(25)
	エンセーテ	uutsa	<i>Ensete ventricosum</i> (Welw.) Cheesm.	エチオピア	11	11	A	42<
	タロイモ	boyna	<i>Colocasia esculenta</i> (L.) Schott	東南アジア	8	11	AB	15<
	ヤウティア	faranji-boyna	<i>Xanthosoma sagittifolium</i> (L.) Schott	熱帯アメリカ	1	2	A	
	ジャガイモ	amaara-dono	<i>Solanum tuberosum</i> L.	南アメリカ	2	1	AB	(3)
	オロモボテト	malo-dono	<i>Coleus edulis</i> Vatke	東アフリカ	3	1	BC	7<
	サツマイモ	sukkaare/sonnoore	<i>Ipomoea batatas</i> (L.) Lam.	中央アメリカ	1	2	AB	2
	ヤムイモ	boye	<i>Dioscorea</i> sp.	東南アジア	3	9	AB	(14)
マメ類	カシュウイモ	bolli-boye	<i>Dioscorea bulbifera</i> L.	東南アジア	0	1	A	
	キャッサバ	mittsa-boye	<i>Manihot esculenta</i> Crantz.	熱帯アメリカ	1	5	A	
	ソラマメ	k'omolo	<i>Vicia faba</i> L.	西南アジア	8	3	AB	3
	エンドウ	heringa	<i>Pisum sativum</i> L.	西南アジア	7	9	BC	5
	コロハ	shuk'o	<i>Trigonella foenum-graecum</i> L.	西南アジア	6	0	A	2
	ヒラマメ	sinbro	<i>Lens esculenta</i> Moench	西南アジア	1	1	BC	
	インゲンマメ	shetere	<i>Phaseolus vulgaris</i> L.	中央アメリカ	9	10	AB	(16)
	ライマメ	ganbeelo	<i>Phaseolus lunata</i> L.	中央アメリカ	1	9	A	
マメ類	ベニバナインゲン	wandara-sukke	<i>Phaseolus coccineus</i> L.	中央アメリカ	0	1	A	
	(ルービン)	faranji-k'omolo	<i>Lupinus</i> sp.	西南アジア	1	0	A	
	キマメ	mittsa-heringa	<i>Cajanus cajan</i> (L.) Millsp.	南アジア	0	3	A	
	フジマメ	p'ak'ale	<i>Lablab purpurea</i> (L.) Sweet	熱帯アフリカ	0	3	A	
	ササゲ	wooshe	<i>Vigna unguiculata</i> (L.) Wasp.	熱帯アフリカ	0	0	BC	
	ケール	manta	<i>Brassica</i> sp.	西南アジア	8	11	AB	4
	カボチャ	leehe	<i>Cucurbita</i> sp.	中央アメリカ	7	11	A	3
	トマト	timatime	<i>Lycopersicon esculentum</i> Mill.	南アメリカ	3	0	A	
野菜類	タマネギ	shunkurt	<i>Allium cepa</i> L.	中央アジア	3	3	A	
	ニンニク	tumo	<i>Allium sativum</i> L.	中央アジア?	3	2	A	
	ニンジン	karoot	<i>Daucus carota</i> L.	中央アジア	1	0	A	
	カエンサイ	k'ay-sir	<i>Beta vulgaris</i> var. <i>rapa</i> Dumort.	地中海沿岸	1	0	A	
	フダンソウ	halak'o	<i>Beta vulgaris</i> var. <i>cicla</i> L.	地中海沿岸	1	0	A	
	アマ	talba	<i>Linum usitatissimum</i> L.	西南アジア	2	1	ABC	
	ヒマワリ	gabgabo	<i>Helianthus annuus</i> L.	北アメリカ	0	2	A	
	トウガラシ	banbare	<i>Capsicum annum</i> L.	中央アメリカ	6	10	A	7
香辛料類	ショウガ	jinjale	<i>Zingiber officinale</i> Rosc.	熱帯アジア	1	0	A	
	コロリマ	okashe	<i>Aframomum angustifolium</i> (Sonn.) K. Schum.	エチオピア	6	3	BC	
	ヘンルーダ	ts'alotte	<i>Ruta graveolens</i> L.	地中海沿岸	5	0	A	

	和 名	方名(「民俗種名」) (マロ語)	学 名	栽培起源地	栽培頻度* (Gaytsa)	栽培頻度* (Shaasha)	栽培地**	品種数***
香辛料類	メボウキ	dunke	<i>Ocimum basilicum</i> L.	熱帯アジア	2	1	A	
	コリアンダー	debbo	<i>Coriandrum sativum</i> L.	地中海沿岸	1	0	A	
	(ヨモギ)	naater	<i>Artemisia afra</i> Jacq.	?	2	0	A	
	(ヒゴタイ)	buulise	<i>Echinops hochnelii</i> Schweinf.	?	1	0	A	
	(カヤツリグサ)	bidire	<i>Cyperus</i> sp.	?	3	0	A	
		zimpad'd'e	<i>Satureja remota</i> (Balf. f.) Vierh.	?	2	0	A	
		ch'awla	under identification	?	2	4	A	
薬用植物	コショウソウ	sibikka	<i>Lepidium sativum</i> L.	西南アジア	5	0	A B	
	レモングラス	ch'ajji-shaare	<i>Cymbopogon citratus</i> (A. DC.) Stapf	南 ア ジ ア	4	0	A	
		bushad'd'e	under identification	?	1	2	A	
	ウイキョウ	shaashinche	<i>Foeniculum vulgare</i> Mill.	西南アジア	3	2	A	
	(ヒユ)	derek'a	<i>Amaranthus hypochondriacus</i> L.	熱帯アメリカ	3	2	A	
	アビシニアガラシ	ts'aara-manta	<i>Brassica carinata</i> Braun	エチオピア	1	0	A	
	(センダン)	iishim	<i>Melia volkensii</i> Gurke	熱帯アジア?	0	0	A	
果物類	サトウキビ	shonkoro	<i>Saccharum officinarum</i> L.	ニューギニア	2	5	A	2
	パッションフルーツ	woyne	<i>Passiflora edulis</i> Sims	南アメリカ	2	1	A	
	バナナ	muze	<i>Musa</i> sp.	東南アジア	0	5	A B	4
	パパイヤ	pappa	<i>Carica papaya</i> L.	中央アメリカ	0	1	A	
	マンゴー	mango	<i>Mangifera indica</i> L.	熱帯アジア	0	1	A	
	ライム	loome	<i>Citrus aurantifolia</i> (Christm.) Swingle	熱帯アジア	0	1	A	
	モモ	koke	<i>Prunus perica</i> (L.) Batsch.	東 ア ジ ア	0	1	A	
観賞用植物	ザクロ	roman	<i>Punica granatum</i> L.	西南アジア	1	0	A	
	(バラ)	ts'igereda	<i>Rosa</i> sp.	エチオピア?	1	0	A	
	オランダカイウ	abeba	<i>Zantedeschia aethiopica</i> Spreng.	南アフリカ	1	0	A	
	マルバヒユ		<i>Iresine herbstii</i> Hook. f.	南アメリカ	5	3	A	
	マリゴールド		<i>Tagetes</i> sp.	中央アメリカ	2	2	A	
	カンナ		<i>Canna</i> sp.	中央アメリカ	2	2	A	
	コスモス		<i>Cosmos bipinnatus</i> Cav.	中央アメリカ	1	0	A	
その他	アラビアカーヒー	tukke	<i>Coffea arabica</i> L.	エチオピア	5	11	A	(2)
	タバコ	tambe	<i>Nicotiana tabacum</i> L.	南アメリカ	4	0	A	
	チャット	ch'aate	<i>Catha edulis</i> (Vahl) Forsk. ex Endl.	エチオピア	1	0	A	
	(クロウメモドキ)	geesho	<i>Rhamnus prinoides</i> L'Herit.	エチオピア?	0	0	A	
	ヒョウタン	bach'e	<i>Lagenaria siceraria</i> (Molina) Standl.	熱帯アフリカ	1	3	A	
		hale			0	2	A	
	ワタ	puuta	<i>Gossypium</i> sp.	?	0	5	A	
	ユーカリ	barzaf	<i>Eucalyptus globulus</i> Labill.	オーストラリア	9	5	A	
			<i>Eucalyptus</i> sp.	オーストラリア	0	1	A	
	(イトスギ)	ts'idde	<i>Cupressus lusitanica</i> Mill.	?	1	2	A	
	(アズマザサ)	woyshe	<i>Arundinaria alpina</i> K. Shum.	?	7	0	B C	
	ダンチク	mak'k'a	<i>Arundo donax</i> L.	?	1	1	B C	
		gatta	<i>Exothea abyssinica</i> (A. Rich.) Anderss.	?	2	0	B C	

*「栽培頻度」は各集落11戸ずつで栽培されていた戸数を表す。

**「栽培地」については、A=家の周囲の菜園および屋敷林、B=Aに隣接する耕地、C=家から離れた耕地、を表す。

***「品種数」では、カッコの数字は概数であることを、「〇<」は〇以上の数あることを表す。

****「モロコシ」にぴったり対応するマロ語は見あたらない。ガイツァでは主要な品種であるdaats'aという語に全てを代表させ、逆にシャーシャではオオムギ、コムギをも含意するbahaという語を用いてモロコシを指示している。

図2 主要な栽培植物の農耕歴

れず、*k'anbara*と呼ばれ、両者は民俗種のレベルで区別されている¹²⁾。この両者の間でも、脱穀の難易に違いがあり（エンマーコムギの脱穀が困難である）、料理法も異なる。すなわち、*k'anbara*は搗いて脱穀したものを粉に挽いて料理するのに対し、*giste*は脱穀したものを炒ったり、ゆでたり、あるいは未熟果を生食したりなど、粒食もさかんにおこなわれる。そのため、両者は同じ畑の中にあっても区画を仕切って栽培されている。名称もそうした区別にしがたかったかたちとなっている。

エチオピアで栽培化され、現在でももっぱらその地で栽培されるエンセーテというバショウ科の植物（*Ensete ventricosum* (Welw.) Cheesm.）は、マロには栽培集団のものと野生集団のものとの両方が存在する。人びとは両者を別のものとして

扱い、名称も区別している。すなわち栽培エンセーテをuutsa、野生エンセーテを?ejoとよぶ¹³⁾。uutsaは人間が塊茎を植え付け、そこから不定芽を誘導することで栄養的に繁殖をおこなうのに対し、?ejoは開花し、受精・結実したのちにできる種子によって繁殖していく。しかし、両者の植物体に外観上違いは見られず、人びとも単に眺めただけでは判別できないという。それらを峻別しているのは、栄養繁殖か種子繁殖かという繁殖様式の違いであり、より人間に即していえば、人びとが繁殖に干渉したかしなかったかという、関与の有無の違いである¹⁴⁾。

果実の中身をくりぬいたものを容器として利用するヒョウタン（*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl.）は、その大きさや利用目的などによって

容器は多数分類されている。しかしその植物自体は、球形の果実をつける *hale* と、中央部のくびれたいわゆるひょうたん型の果実をつける *bach'e* とに区分されているだけである¹⁵⁾。両者は果実の形状以外大きな違いはなく、果実の実る前の植物体や種子だけからでは識別するのが困難とされる。そのため人びとは両者の種子を別個に保管し、必要に応じてそれぞれの播種をおこなう。そしてこの区分は、収穫後におこなう加工の方法の区分とも対応している。重要と思われるのは、*hale* と *bach'e* の形態的な類似性は人びとによって十分認識されているにもかかわらず、上に述べたオオムギなどの場合同様、両者を総称する名称が欠如しているということである。

マロ語の民俗種が植物学における複数種のものを含んでいる事例には、さきほどふれた *giste* の他に、観賞用植物およびユーカリがある。*ts'igereda* とよばれるバラ (*Rosa sp.*) 以外の観賞用植物は、マロでは *abeba*¹⁶⁾ と一括してよばれるのみである。それらは植物学的には、属はもちろん科あるいはそれ以上のレベルでみても様なものから構成されているわけではない。しかし、観賞のために栽培されるという利用目的では共通しているため、同一の名称が用いられているのだと考えられる¹⁷⁾。

このような植物学的な種の区分と一致していないものの事例から、人びとの利用法や関与の仕方がマロの民俗種の区分に影響を与えていることがわかる。しかしそもそも、この民俗種とは、栽培をおこなう上で区別される単位という実用的な意味をもつものであった。これらの種の区分と一致していない事例によって、あらたに民俗種の分類が単に栽培の仕方のみならず、調理や加工する上での区別といったより利用に即したことがらによっても規定されている側面のあることがうかがわれ、この分類の実用的な性格がいっそう明らかになったといえるのではなかろうか。これは後述する品種の分類およびさらにその下位の分類では、植物の外観上の差異にもとづく認知的な分類が基本となっており、実用的な意味あいはいささくなっているのと対照的である。

2.2.2 民俗種を包括するカテゴリー

栽培単位である民俗種を包含するカテゴリーが

マロ語にはいくつか存在する。それらをここでは「包括的カテゴリー」とよぶ。そのなかでもっとも広い意味領域をもつのは *kattsa* という語である。およそ「食用植物」といった意味で、観賞用や建材用などで栽培される植物は含まれない¹⁸⁾。その *kattsa* の一部である *baha* は穀類のうち、*banga* (カワオオムギ) と *murk'a* (ハダカオオムギ), *giste* (エンマーコムギ以外のコムギ) と *k'anbara* (エンマーコムギ), および *daats'a/baha* (モロコシ) のみを指示する。つまり、穀類のなかでも *badala* (トウモロコシ) と *gaashe* (テフ) は含まれない。*dono* もイモ類の一部 *malu-dono* (オロモポテト), *amaara-dono* (ジャガイモ), *sukkaare/sonnoore* (サツマイモ) のみを指し、*uutsa* (エンセーテ) や *boyna* (タロイモ), *boye* (ヤムイモ) などは包含されない¹⁹⁾。*sawo* は「香料植物」といった意味で、*okashe* (コロリマ), *ts'alotte* (ヘンルーダ), *dunke* (メボウキ), *debbo* (コリアンダー) などがそこに含まれる。この *kattsa* 内部の分類の概要を図3に示した。マロではこうした包括的カ

図3 食用栽培植物 (*kattsa*) の分類

テゴリーは少数存在するにすぎず²⁰⁾、すべての民俗種を均等にまとめあげていくようなかたちにはなっていない。

2.2.3 品種分類に認められる傾向

栽培植物の民俗種の一部は、その内部でさらに分類がおこなわれている。その民俗種より下位の名称による分類を「品種」²¹⁾とよぶ。表1からわかるとおり、全栽培植物の約3割にあたる23民俗種に品種分類が存在する。

マロでこうした民俗種より下位の分類がなされるのは栽培植物に対してのみで、野生植物にはそうした分類はなされない。これは、栽培植物は野生植物より細かく分類される傾向があるというバーリンらの主張 (Berlin 1976, 1992; Berlin, Breedlove, and Raven 1966) と符合している²²⁾。

のみならず、品種分類がおこなわれるのは、栽培植物の中でも人びとがよく栽培し、日頃から目にする機会の多いものである。これは表1の「栽培頻度」から、品種が認められる栽培植物は11戸あたり平均5.8戸 (53%) で栽培されているのに対し、品種が認められないものは平均1.6戸 (14%) のみであるという結果からも明らかである。栽培頻度の割合が50%をこえる16民俗種の栽培植物のうち、実に15のものには品種が存在している。のちにとりあげるタロイモとエンセーテは86%および100%ときわめて高い割合で人々に栽培されていることに留意しておきたい。

品種分類の認められる栽培植物は、食糧源として重要で、まとまった土地で栽培される穀類とイモ類に、多く集中していることも指摘しうる。すなわち品種の認められる23民俗種の栽培植物のうち、13のものが穀類とイモ類であり、穀類では7民俗種のすべてに、イモ類では9民俗種のうち6つに品種分類が認められる。

またその穀類とイモ類では、弁別される品種の数が他の栽培植物より相対的に多いことも指摘できる。穀類とイモ類では一民俗種で区別される品種の数はそれぞれ平均11.1, 13.8であるのに対し、それ以外の栽培植物では平均4.8にとどまっている。

これから、多くの人びとが栽培する植物には

品種分類が存在し、なかでも人びとにとって重要な穀類とイモ類には多数の品種が弁別される傾向があるということができる。

のちにみていくように、このことは品種内部の分類についても成り立っている。タロイモとエンセーテは、単に品種が多数識別されるにとどまらず、そのうちの一部の重要な品種では内部でさらに分類がおこなわれているのである。このため、以下ではタロイモとエンセーテの品種分類を具体的に検討していく²³⁾。それらには重層的な構造をもつ分類体系が内部に発達しており、品種分類を考察していくうえで重要な題材を提供していると考えられるのである。

3. タロイモの利用と分類

3.1 タロイモの品種分類と実際の利用区分

マロ語で *boyna* とよばれるタロイモ [*Colocasia esculenta* (L.) Schott] は、高度2,500m以下の、家の近くの畑地や水湿地で1年を通じて栽培されるサトイモ科の栽培植物である。ひとつのタロイモ畑のなかにもさまざまな形態のものが混在しており、一見して多様な変異が含まれていることがわかる。

筆者はそうした多様な変異がみられるタロイモを人びとがどのように分類しているかを把握しようと、2つの集落の男性計18人に対して1人ずつ²⁴⁾、自身の畑の前で「これはどのタロイモですか (*ha'i ab boyna*)?」とたずねて、その品種名や特徴を聞き取り、同時に外観の記載もおこなった。

その結果、タロイモは約15の品種に区別されていることがわかった²⁵⁾。それらを見分ける手がかりは葉柄の色、葉裏の色、葉の反りの有無および反る場合はその反り方、分けつの度合い、葉と葉柄の大きさの割合など、地上部の外観的特性からえられていた。主要な品種とその一部にみられる下位分類 (後述) の外観的特性や諸性質を表2に示した。

人びとはこうした地上部の外観的特性のみならず、塊茎の形や味覚という栽培中には直接うかがうことのできない性質についても、精細な知識を

表2 主要なタロイモ品種の特性

品 種 名		塊茎の形	葉柄の色*	葉裏の色	葉の反り**	栽培地***	味覚	性	その他
kaate	kal'ate-kaate	kaate型	白+黒い襟	白	—	1, 2	○	メス	
	karts-kaate	kaate型	黒	白	—	1, 2	○	メス	
	jolo-kaate	kaate型	緑	白	—	1, 2	○	メス	
	siik'e-kaate	kaate型	黒	緑	—	1, 2	○	メス	
dimo		kaate型	白+黒い襟	白	—	1, 2	△	メス?	2年目に収穫する
ch'ulo	karts-ch'ulo	ch'ulo型	黒+白い襟	緑	—	1, 2	○	メス	
	jilile-ch'ulo	ch'ulo型	緑+白い襟	黒	—	1, 2	○	メス	
kiishe		ch'ulo型	緑+白い襟	黒	—	1, 2	○	メス	生育小 子芋多い
ongaro		ch'ulo型	緑+白い襟	黒	—	1, 2	○	メス	生育大 子芋少ない
gara		ch'ulo型	黒+白い襟	黒	++	1, 2	○	メス	
gawro		ch'ulo型	緑+白い襟	黒	+	1, 2	○	メス	
jolo		ch'ulo型	緑+白い襟	緑	—	1, 2	△	メス	
siik'e		ch'ulo型	黒+白い襟	白	—	2	×	オス	
boots-boyna		ch'ulo型	白	白	—	2	×	オス	
zirge	boots-zirge	zirge型	白	白	++	1	○	メス	
	karts-zirge	zirge型	黒+白い襟	黒	++	1	○	メス	
	ch'ulo-zirge	zirge型	緑+白い襟	黒	++	1	○	メス	
uma-shuccha		zirge型	緑	白	++	1	○	メス	
wombe		zirge型	黒	白	—	1	△	オス?	
jawsha		zirge型	白	白	—	2	△	オス	小さい芋しかできない

*葉柄の色で、「白+黒い襟」とは葉柄の大部分は白いが、「襟掛け」とよばれる葉柄基部から葉鞘部にかけてが黒いもの、の意味。「黒」とは、葉柄の全体が黒っぽいもの、の意味。以下も同様。

**葉が反るものでも、葉先が下を向いて水がたまらない(kup'ito'a)もの(表中の「+」)と、葉先が上を向いて水がたまる(kup'itiza)もの(表中の「++」)とに区別されている。

***「栽培地」の「1」は畑地(gade)を、「2」は水湿地(ch'are)をあらわす。

この表には、外観的特性がはっきりし、名称との対応で重複の起こっている可能性の少ないもののみをあげた。

図4 タロイモの塊茎の3つのタイプ

有していた。むしろ、品種の識別をおこなうのに用いる外観的特性についてより、こうした性質の方に人びとは強い関心を寄せているようであった。それは、この塊茎の形および味覚という2つの性質にもとづいた区分が、栽培や調理をおこなう上で区別される単位となっていることと関係があるものと思われる。

3.1.1 塊茎の形にもとづく区分

マロでは、タロイモの塊茎(イモ)は親イモの形と子イモのつき方から、3つのタイプが区別されている。それらは、

(a) 子イモをほとんどあるいはまったくつけず、

- 親イモが下方にむかって大きく生長するタイプ。
 (b) 親イモのまわりに球形の子イモが多数つくタイプ。子イモの数は10前後。
 (c) 親イモも子イモも細長く生長し、特に子イモは横方向に広がって伸びていくタイプ。子イモの数は5前後。

である。それらを模式的に示したのが図4である。

これらの3つのタイプを表す特定のマロ語があるわけではない。人びとは個々の品種の塊茎について説明するとき、それぞれのタイプの典型的品種である *kaate*, *ch'ulo*, *zirge* に代表させて「*kaate* のようだ (*kaate gark*)」「*ch'ulo* のようだ」「*zirge* のようだ」などと表現する。したがって、ここでは便宜的に(a)を *kaate* 型、(b)を *ch'ulo* 型、(c)を *zirge* 型と呼ぶ。この3つのタイプでは時に栽培や利用の仕方が異なっている。

まず栽培法では、どの部位を植え付けに用いるかがタイプにより少しずつ異なっている。どのタイプでももっとも普通に用いられるのは、掘り出された親イモの塊茎上部が少しついた形で切り出された葉柄である。これをマロ語で *k'oor*a という。ほかには、親イモ (*miskata*) から切り離された子イモ (*mara*) や、親イモの下半分を縦に4つに切ったもの (*anch'e*) が用いられる。それぞれのタイプでこのいずれが用いられるかを示したのが表3である。植え付ける際には、この *k'oor*a と *mara*, *anch'e* が交互になるようにするのがよいという。

収穫された塊茎は、通常蒸し煮にして食べる (*kattsa*)²⁶⁾。しかし、ヤムイモで普通するように焼いて食べることも時々あり (*misha*)、それに適するかどうか3つのタイプでやはり異なっている (表3)。

表3 タロイモの塊茎の形にもとづいた利用区分

	<i>kaate</i> 型	<i>ch'ulo</i> 型	<i>zirge</i> 型
植付け部位			
<i>k'oor</i> a (葉柄+塊茎上部)	◎	◎	◎
<i>mara</i> (子イモ)	×	○	○
<i>anch'e</i> (親イモの一部)	△	△	×
料理法			
<i>kattsa</i> (蒸し煮)	◎	◎	◎
<i>misha</i> (直焼き)	×	△	○

頻度

◎：ひんぱん ○：ときどき △：まれ ×：なし

3.1.2 味覚による区分

マロのタロイモの各品種はその味覚によって *mal'iza* 「おいしい」/*mal'oya* 「おいしくない」のどちらかに分けられるとされる。そしてこの区分にしたがって *maccha* 「メス」/*ladde* 「オス」という「性」が品種に対して付与されている。すなわち、味覚の優れる「おいしい」品種は「メス」とされる一方、「おいしくない」ものは「オス」品種とみなされる。ガイツァ集落では品種に対する「性」の付与は一般的とはいえないが、味覚による同様の区別は認識されている。

この「性」区分は、人びとの味覚の評価を示しているだけでなく、植え付ける場所を選定する際の目安ともなっている。「オス」品種の一部は普通の畑地で栽培すると「えぐい味がする (*dukkiza*)」ものになるため、小川の縁などの水湿地で通常栽培される。反対に、*zirge* 型のメス品種のものは、水湿地に植えるとよく育たないとされる。

ここまでのタロイモの品種分類を整理しておきたい。人びとにタロイモの種類をたずねたところ、15の品種名が挙げられた。彼らはその同定の手がかりとなる外観的特性はもちろんのこと、直接観察できない味覚などの性質についても精細に把握していた。このことから、人びとにとり品種というまとまりがタロイモの基本的な弁別単位となっていることが推定される。しかしその一方で、実際に栽培や調理をおこなっていく上では個々の品種レベルで区別されることはまずない。各品種の属性として把握されている性質 (塊茎の形および味覚) による二、三の大まかな区分が実際の弁別単位となっているのである。

これらの性質による区分にもとづいて全品種を整理し、所有頻度の高い順に示したのが表4である。そこにあげた15の品種のうち、その名称から意味をたどれるものは3つ (部分的なものも含めれば4つ) のみである²⁷⁾。それ以外のものには何ら意味は見いだされず、タロイモの品種名として固有に用いられているものである。

3.2 タロイモ品種の下位分類

表4にかかげた15の品種のうち、*kaate*, *ch'ulo*,

表4 主要なタロイモ品種の属性と所有頻度

	kaate型	ch'ulo型	zirge型
「メス」品種 (味覚良好)	kaate* 15 dimo 3	ch'ulo* 11 jolo 9 gara 9 kiishe 4 ongaro 3 gawro 2	zirge* 12 uma-shuchcha 4 budo-gabidda 2
「オス」品種 (味覚不良)		siik'e 11 boots-boyna 11	wombe 6 jawsha 3

数字は聞き取った18人中何人が所有しているかを表す。
複数の人に所有されている品種をあげた。

*印を付けたのは名称によりさらに細かな分類がなされるもの。

zirgeという3つの品種(表の中で*印のついているもの)では名称により、さらに細かな分類がおこなわれている。いずれもこれらはすぐれた味覚をもつ「メス」品種のものであり、また3つのタイプの中でそれぞれもっとも所有頻度の高い品種であることに注目したい。

この3つの品種に対してなされる下位分類を示したのが図5である。これらの名称はタロイモの種類を最初にたずねる段階ではまず言及されない。一通り聞き取ったのちに「kaateは1種類だけか、それともkaateの中にも種類があるのか(kaate

- (a): 色彩名 + 品種名
(b): 品種名 + 品種名
(c): (不明) + 品種名

図5 3つのタロイモ品種の下位分類

petti aynetto tsarara bay? woy kaate giddo-kka aynetto yene?)」などと問うことによって、はじめて挙げられてくるものである。

その名称は、基本となる品種名(kaate, ch'ulo, zirge)の前に修飾的な語彙素(lexeme)が付加された複合的な構成となっている。その修飾的語彙素は、色彩名(図5の(a))や品種名(同(b))などいくつかの場合がある。

(a) 修飾的語彙素が色彩名の場合

その色彩名は葉柄の色に言及しているのだとされる。たとえばkarts-kaateの場合、葉柄の色がkarts(黒)のkaateということである。bootsは葉柄が白いことを、kal'ateは葉柄の大部分は白いが、葉柄基部から葉鞘部にかけての「襟掛け」とよばれる部分に黒みが入っていることを示している²⁸⁾。

(b) 修飾的語彙素も品種名で、したがって品種名が2つ連続する構成となっている場合

基本となる2番目の品種名が塊茎の形の区分によるものである点は他の場合と同じである。しかし、1番目の品種名については、その葉柄の色に言及しているとされる。つまり、1番目の品種名の葉柄の色をもつ2番目の品種名の塊茎のものということである。たとえばjolo-kaateの場合、葉柄の色がjolo品種の葉柄のように緑色をしているkaateという意味である。ただ厳密にいうと、joloという品種の葉柄の大部分は緑色であるものの、「襟掛け」の部分には白色が入っており、jolo-kaateの葉柄の色とぴったり一致しているわけではない。しかし、jolo-kaateの意味を彼らにたずねれば、kaateの一種で、葉柄が「joloに似たkaate(jolo aaziza kaate)」だと説明される。このことから、彼らは複合的構成をもつ名称を無意味な固有名詞としてではなく、記述的なものとしてうけとめ、その命名原理に対して理解をもっていることはまちがいない。しかし、その記述は同定に用いるのにたえるほど厳密なものではないため、実際の場面では、それよりはるかに詳細で豊富な経験的知識を動員して同定をおこなっているものと思われる。

ここまでのところから、1番目の語彙素は(a)色

彩名、(b)品種名のいずれの場合とも、利用部位である塊茎の性質に言及しているのではなく、利用とは直接関わらない葉柄の色という外観的特性に関するものであることがわかった。実際、この下位分類で区別されるものどうしでは葉柄や葉裏の色が異なっているのみで、それ以外の塊茎の形や味覚などの利用と関わる性質は基本的にはすべて同じとされているのである。

さきほどの図5から、*kaate*という人びとにもっとも高く評価される品種が1番多数に区分されていることがわかる²⁹⁾。*ch'ulo*および*zirge*は3つずつであるのに対し、*kaate*のみは6つにわけられている。また、これらの品種に対して1人の人間があげた下位分類の数でも*ch'ulo*が平均1.2、*zirge*が1.7であるのに対し、*kaate*は3.5にものぼっている。

マロのタロイモの分類の全体を図6に示した。本節(3.2)の冒頭で、品種の下位分類が認められ

るのは「メス」品種という味覚について積極的評価の与えられるものであり、また3つのタイプの中でそれぞれもっとも所有頻度の高いものであることを指摘していた。このことと、*kaate*がもっとも多数に分類される事実から、タロイモという一栽培植物の内部の分類においても、人びとが積極的に評価し、また実際に多くの人が栽培している品種で、より精細な分類がおこなわれているといえよう。これは、前章の2.2で栽培植物の分類にみられる特徴としてあげたものと符合している。

4 エンセーテの利用と分類

4.1 エンセーテの栽培と利用

エチオピアの西南部地域を中心に栽培利用されているバショウ科のエンセーテは、一見したところバナナによく似ている。しかしその食用部位は果実ではなく、塊茎および偽茎であり、また繁殖も株分けによってではなく、植え付けた塊茎から不定芽を誘導することによっておこなわれる³⁰⁾。

その栽培は、雨季の最盛期(6~8月)と乾季(12~2月)以外の時期に未熟なエンセーテ(2~3年のもの)を種芋用に掘り出すことから始まる。掘り出された塊茎を縦に半分に切って、その断面に縦横に細い筋をいれ、上部が上になるように斜めに埋めていく。そこから萌え出てきた多数の芽を数カ月後に移植するというものである。移植はその後も数年ごとに繰り返すのが普通である。

料理法は大きく2つの系統に分けられる。ひとつは塊茎を5cm角前後に切ってつばに詰め、蒸し煮をするもので、マロ語で*kattsa*という。これには通常、塊茎は小さいが味覚のすぐれた「メス」品種のものが用いられる。通常一緒に煮たケール(*Brassica sp.* 方名*manta*)とセットにして食べる人びとの好む料理である。1回の調理で大量にでき、儀礼時の共食用などに供されるが、保存性は高くない。

一方、大きく生長した「オス」品種のものは、塊茎をつき崩したものと偽茎の内部をしごき出したものとを混ぜ合わせ、それを2週間ほどおいて発酵させたのち、焼いたり蒸すなどして少しずつ

図6 タロイモ (*boyna*) の分類

調理していく。この発酵したデンプン質の混合物のことを *mala* といい、多くの家の裏庭で保管されている。この *mala* およびそれを焼いたパン状の *boora* は保存性がきわめて高いのが特徴である。

食用以外にもエンセーテには物質文化的な利用法がさまざまに発達している。たとえば、葉軸を取り除いた葉 (*yeche*) は、食物を包んだり、ふたにしたり、座る際に下に敷いたり、何枚も重ねてベッドを作ったりする。乾燥した葉軸 (*suge*) は、もっとも一般的な紐として包みや薪を縛るのに用いられる。乾燥した下部の偽茎 (*gobba*) は、香辛料やバター、卵など小物を包むのに用いられる。偽茎をしごいた後に残る繊維 (*gola*) からは帽子を作ったり、紐をよったりする。

このようにエンセーテは各部位が広く利用され、日常的な道具の供給源として人びとの生活に欠かせない重要な植物となっている。実際、病気で枯らせてしまった場合をのぞけば、マロのすべての家で栽培されている。このエンセーテの重要性は、その品種が豊富であるということにも示されているように思われる。

4.2 エンセーテの品種分類

エンセーテの品種に関する聞き取りも、18人の男性（ガイツァ集落16人、シャーシャ集落2人）から各人の所有するエンセーテを前にそれを確認していくかたちでおこなった。それを整理したものが表5である。この表の「所有」とはその品種をもっていた人の数を、「存知」とは本人はもっていないものの、その存在を知っているとして挙げた人の数を示している。

同様に「外観的特性」とは、各品種を識別する際の手がかりとなる外観上の特性で、以下のようなものがある。偽茎の色（赤や白い色素が入るか）と模様（黒斑の有無や多少）、葉軸の色、偽茎の形（太いか細いかなど）、葉が開出する度合、葉の形、葉の性質（裂けやすいかどうか）などである。人びとはこれらについて、言語で標識化されるよりはるかに細かく弁別しており、これらの特性の中から特徴的なものをいくつか組み合わせることによって、実際の同定をおこなっているものと考え

えられる。

表5の「性」とは、タロイモ同様、味覚の違いにもとづいて人びとが各品種に付与するものである。ただしタロイモの場合と異なり、エンセーテの「性」差は単に味覚のレベルにとどまらず、形態的な違いや栽培法・料理法などの違いとしてもあらわれている。それらを示したのが表6である。

味覚のすぐれる「メス」品種は偽茎が細いのに対し、「オス」品種では相対的に太いため、両者を見分けるのは比較的容易である。この「メス」品種は「オス」品種より生育が早く、「オス」品種の半分ほどの2～3年で食用可能となる。その場合、先ほどもふれたように塊茎を蒸し煮して食べることが多い。一方、時間はかかるが大きく生育する「オス」品種は、偽茎と塊茎をともに利用し、発酵させたもの (*mala*) を焼いたり蒸すなどして食べる。両者の間では植え付けられる栽培地も異なる傾向がある。すなわち、「メス」品種は家の上部の土地に植ええられるのに対し、「オス」品種は土の肥沃な下部の土地に植えられることが多い。

マロで見聞した42品種の「性」の内訳は、「メス」38、「オス」4と、「メス」品種が圧倒的に多い。しかし、各家で栽培されている株数では、「メス」品種と「オス」品種とで合計はほぼ等しい。つまり、1品種あたりの株数でみた場合には、「メス」品種は「オス」品種に比べ、逆に少なくなっている。実際個々の「メス」の品種は数株ずつしか栽培されていないことが多い。

ここまでからわかるように、エンセーテの「性」に対する価値づけはタロイモの場合のように単純なものではない。味覚が劣るとされる「オス」のエンセーテに対しても独自の料理法が用意されていたり、所有頻度（つまり栽培頻度）も一部の「オス」品種は「メス」品種のものを上まわるといった具合である。「メス」＝プラス評価、「オス」＝マイナス評価と一概に断定することはできないのである。エンセーテの「性」区分は、形態や味覚の差にとどまらず、栽培の期間や場所、料理法などにも関係しており、その意味で、タロイモの「性」区分より、実際の利用に密着した区分であるといえよう。

表5 エンセーテの品種とその特性

品種名	所有*	存知*	性**	下位分類***	外観的特性	品種名の意味など
k'arta	17	0	M	6	偽茎がピンク色	ハダカオオムギに同名の品種ある
genna	16	0	M	4	偽茎濃緑、上部少し黒い	
maze	13	0	M	7	偽茎が太い	カワオオムギに同名の品種ある
halako	12	1	F	4	偽茎黒がかすんで入る	低地の樹木野菜に同名のものある
dalule	12	1	F	0	葉の開く角度小さい	
d'uufa	11	1	F	1	粉をふいたように白い	
worja-maccho	11	0	F	1	偽茎赤地に黒入る	worjaは不明, macchoは「妻」の意
ech'are	11	0	F	0	葉が容易に裂ける	「ネズミ」の意
budisa	9	1	F	0	偽茎に黒い斑点入る	ビールを作る工程に同名のものある
acha	8	0	F	0	偽茎赤、葉軸濃赤色	
geetaro	7	0	M	0	偽茎太い、葉の開き大	
moso	4	2	F	0	すべて白い	
anke	4	1	F	0	葉細い、葉軸赤	ankaという野生植物あり
borgode	3	3	F	0	gennaに似る	
dada-maccho	3	2	F	0	葉細い、偽茎赤地に黒斑	dada「雷」、maccho「妻」の意
gaarats'e	3	1	F	0	d'uufaに似る	
irsante	3	0	F	0	葉が裂ける、葉軸赤	
banga	3	0	F	0	偽茎赤地に黒い斑入る	「カワオオムギ」の意
afilo	3	0	F	0	葉細い、葉軸白	afilaで「服」の意
loch'e	3	0	F	0	葉軸紫、葉の縁赤入る	
kaate-gad'int	3	0	F	0	すべて白、葉が丸まる	kaate「王」、gad'int不明
suuto	2	1	F	0	すべて白	suutsで「血」の意（切ると出る液が赤変する）
maahe	2	1	F	0	偽茎・葉軸に黒い斑点	「ヒョウ」の意
gol ? o	2	0	F	0	葉軸濃赤色	
kattane	2	0	F	0	葉軸赤色	
ts'arts'are	2	0	F	0	葉が丸まる	
kuncha	2	0	F	0	偽茎全体が黒い	
arpa	2	0	F	0	偽茎白地に黒、葉軸白	
zinke	1	2	F	0		
wod'mare	1	1	F	0	偽茎赤、葉軸ピンク	
bukuma	1	0	F	0		
okashe	1	0	F	0	葉軸濃赤色、葉の縁赤い	「コロリマ」（栽培植物の一つ）の意
dangarsa-shuuk'ule	1	0	F	0	偽茎・葉軸に黒い斑点	dangarsa「ゾウ」、shuuk'ule（野生植物の一）
guufe	1	0	F	0	偽茎白地に黒が薄く入る	
dagga	1	0	F	0	葉軸赤色	同名の野生植物あり
tire	1	0	F	0	葉軸濃赤色、葉の縁も赤	
ch'ada	1	0	F	0	葉が細い	
gaashe	1	0	F	0		「テフ」（栽培植物の一つ）の意
? arnaats'e	1	0	F	0		
sinik'e	0	1	F	0		
dama	0	1	F	0	偽茎がかゆみの葉になる	
boosina	0	1	F	0	偽茎白地に黒がかすむ	

*「所有」および「存知」は聞き取った18人中で、所有している人の数（「所有」）、およびもっていないが名前は知っているとしてあげた人の数（「存知」）を表している。

**「性」のFは「メス」であることを、Mは「オス」であることを示す。

***「下位分類」の数は何人の人がその品種に対してさらに細かな分類を行ったかを表す。

表6 エンセーテ品種の「性」差による特性区分

	味覚	偽茎	生育 (栽培期間)	料理法*	栽培地**	品種数	品種あたり株数
「メス」品種	優	細い	早い (2~3年)	kattsa	家の上部	多い	少ない
「オス」品種	劣	太い	遅い (5~7年)	mala	家の下部	少ない	多い

*kattsaは、塊茎を5cmほどの方形に切ったものをつばで蒸し煮する料理。

malaは、偽茎の内部をしごきとったものと、塊茎をつき崩したものと混合物を数週間おいて発酵させたものことで、これを焼いたり、蒸すなどして食べる。

**マロには平地らしい平地はなく、斜面を削ってならした土地に家が建てられる。

エンセーテはその家を取り囲むように植えられる。「家の上部」とは家より上部にある斜面上の土地で、「家の下部」とは家より下部にある斜面上の土地である。

下部の土地の方が土壌が肥沃であると人びとは認識している。

図7 エンセーテ品種の下位分類

さきほどの表5のなかの「下位分類」とは、その品種に対して下位分類をおこなった人の数を表している。そこであげられたものを図7に示した。この下位分類のレベルで区別されるものどうしても、偽茎や葉軸の色というごくわずかな外観上の違いがあるのみで、他の外観の特性や味覚などについては一切違わないとされる。

その下位分類の名称も、タロイモの場合と同様、基本となる品種名の前に修飾する語彙素がつくという複合的構成をとっている。ただし、goonazoは例外的に単独の語彙素からなり、worja-macchoの場合、基本となる品種名がそもそも複合的な構成のものである³¹⁾。

下位分類の名称を、その1番目の語彙素にしたがって分類すると、まず(a)1番目の語彙素がboots「白」、zok'o「赤」、karts「黒」という色彩名の場合がある。いずれも偽茎上部の色に言及している。つぎに(b)品種名の場合であるが、これにあてはまるのはpiile-gennaのみである。ただしこのpiileはタロイモの品種名であって、エンセーテの品種名ではない³²⁾。これら以外にエンセーテの場

合には(d)由来名のものである。すなわち、マロの南のバスケットとの境界近くのDokoの人びとの多くすむ地域由来のものにdokoをつけ、もともとマロにあったものに、gade (「くに」の意味) とつけることで区別を設けている。(c)は意味不明のものである。

表5では、各品種を所有頻度の高いものから順に並べてある。それを見ると、品種によって所有頻度に大きな違いがあることがわかる。そのうち下位分類がみられるのは所有頻度の高い上位7位のものまでに集中している。つまり、多くの人が栽培する品種に下位分類がなされる傾向があるといえよう。その頻度(「下位分類」欄の数字)に関しても、所有頻度の上位のものほど、高くなる傾向が大まかではあるがみいだされる。

こうしたことから、エンセーテの分類についても、所有頻度が高い品種ほど細かく分類される傾向があるということがいえよう。タロイモの分類との比較でいえば、エンセーテの場合、「メス」=プラス評価、「オス」=マイナス評価とは一概にいえ、むしろ「性」はより利用に即した区分となっており、その双方の「性」の品種で下位分類がみられる点が違いとして指摘できる。

5 考 察

ここまで述べてきたことをあらためてふりかえてみたい。

1) マロの人びとによる栽培植物の分類は、栽培する上での区分にもとづいた実用的な分類が基本と考えられる。その大半は植物分類学における種の区分と一致している。しかし一致していないものについて検討してみると、栽培法のみ

ならず利用法もその分類に影響を及ぼしていることが明らかになる。本稿ではこの分類のレベルを、分類学における「種」と対比させる意味で「民俗種」とよんだ。

- 2) 人びとが繁殖に管理・介入し、その意味で人びととのつながりが密接な栽培植物にのみ、民俗種の内部で名称によるさらなる分類がおこなわれる。すなわち品種分類がなされている。
- 3) 栽培植物の中でも、栽培頻度が高いものに、品種分類が認められる傾向がある。
- 4) 品種分類がおこなわれる栽培植物でも、穀類やイモ類などまとまった面積で栽培され、食糧源として重要な栽培植物に多数の品種が弁別されている。
- 5) タロイモとエンセーテの品種分類では、人びとから積極的な価値づけがなされたり、栽培頻度の高い一部の品種に対して、修飾的な語彙素を付加するかたちで、さらに下位の分類がおこなわれている。
- 6) 品種に対して下位分類が与えられる場合でも、人びとが高く評価し、あるいは実際に多くの人々が栽培している品種が多数に分類される傾向がみられる。

これらを以下のようにまとめることもできるだろう。すなわち、マロの人びとによる栽培植物の分類は、栽培や利用の区分にもとづいた分類が基本にあつて、それより下位の分類では、多くの人々が栽培し、高い評価を与えているものほど、精細な分類がなされている、と。人びととのつながりが密接な植物ほど、分類が多数にそして深くまで掘り下がっていくかたちに形成されているのである。植物との関与の仕方によって分類体系はかわりうるものであることを示唆しているのだともいえよう。

これは、松井(1996)のいう「実用主義」的な分類・命名ということで一見理解可能なように思われる。その「実用主義」とは、「生業活動、あるいは重要な生活上の必要を満たすために、彼らの周囲にある事物にはひとつひとつ名前が付けられ、その採集や利用の便がはかられて」おり、「命名は、生活におけるそれらの利用の能率化のために」おこ

なわれているとする立場である(松井1996:170)。

ところがタロイモやエンセーテのところで述べたように、個々の品種に対応するかたちで利用法が細かく区別されているわけではないのが実際である。栽培や調理という利用にもとづいた区分としてならば、識別されている品種の数よりはるかに少数ですむはずなのである。にもかかわらず、品種は多数弁別され、さらに一部の品種では、より精細な下位分類がおこなわれているのである。

「実用主義」的観点からみて重要と思われる対象に対して、詳細な名称付与がなされている点は間違いない。しかしそれは「実用主義」的観点から要請される水準をはるかに上まわった、いわば過剰な分類となっているのである。では、なぜそのような「過剰な」分類がなされているのだろうか。いや、そもそもそれはほんとうに「過剰な」のだろうか。

ここでもう一度タロイモの事例をふりかえってみたい。タロイモが栽培や調理などの実際の状況で区別されるのは、塊茎の形や味覚の違いにもとづいたごく少数の区分によってであった。しかし、それを指示する固有の名称があるわけではなく、個々の品種についての属性というかたちで把握されているものであった。むしろ、タロイモの分類として人びとにより一般的なのは、15ほどある品種のレベルであった。それらには名称が与えられ(その多くは固有のものである)、日常目にするのできる地上部の形質、すなわち葉柄の色、葉裏の色、葉の反り、分けつの度合いなどから同定されていた。そしてこのうちの一部の品種については、葉柄や葉裏の色彩の違いによって、さらに細かな分類がなされていた。その名称は、基本となる品種名の前に修飾的な語彙素を付加することで類別がおこなっていた。

つまり、タロイモの分類をまとめてみると、その大きい単位のものから、

- ① *boyna* という民俗種 (利用レベル)³⁾
 - ② 塊茎の形や味覚による区分 (半利用レベル)
 - ③ 15の品種 (言及レベル)
 - ④ 3つの品種での下位分類 (認識レベル)
- と整理することができるだろう。

ここで重要なのは、分類のまとまりが小さくなっていくにつれて、弁別をおこなう基準が実用的な視点から離れ、外観の微小な差異の識別に向かっていることである。端的に言えば、最小の分類である「④3つの品種での下位分類」では、利用とかかわらない一部の部位の色彩のみが違うだけであって、実用性に関する違いは一切ないとされているのである。

これは、人びとは実用性と関わりなく、対象を認識し、分類・命名を高度におこなえんとする「主知主義」(松井1996)の立場を一見擁護するものであるように思える。しかし実用性に対して中立なのは、あくまで同じ分類レベルの中でしかない。一部の栽培植物の間でだけ、品種分類がなされ、さらにその中の一部の品種に対してのみ、より細かな分類がなされることを、説明することはできないのである。

人びととのつながりが密接な植物に細かな分類がなされること、その細かな分類は実用面から要請されるよりはるかに精細なもので、そのもっとも精細なものでは一部の部位の色彩の差異のみによっているという事実は、「実用主義」や「主知主義」の立場に拘泥している限り、決して理解することはできないように思われる。

これを解く手がかりは、もっぱら人間が対象を認識し、それを利用するという人間中心的な図式をすてて、これまで所与の対象物としてのみあった植物に目をむけてみることから得られてくるのではないだろうか³⁴⁾。

実は、マロの人びとにとってはもちろんのこと、新参者である私にとってさえ、彼らの分類体系はある意味では自明なのであった。品種分類のみられる植物はそれのない植物に比べ、明らかに多様な形態的変異が存在していたし、下位分類のなされる品種はそうでない品種に比べ、一部の部位の色彩が多様であるなどしたからである。つまり、人びとのもっている分類体系が導き出されてくるような形態的変異が植物の側に存在していたのである。植物の形態に目をむけ、その名称との対応をおさえていくなら、彼らの分類は、決して「過剰な分類」などではなく、植物の形態の差異を忠実に反映した分類であるにすぎないのである。

しかし、その分類にはそれ以上の意味が込められているのではないかと思われる。分類体系に映

し出される植物の形態の多様性はたしかに自明なものであったとしても、それは所与のものであることを意味するわけではない。むしろ、人間が植物にさまざまな働きかけをおこない、植物はその影響を受けるとともに、植物の方でも突然変異などによって形態の変化が生じ、人間はその影響を受けていくという、人間と植物との相互往復的な関わりのなかから創出されてきたと考えられるものである³⁵⁾。そうであるならば、そこに存在する多様性はまったくランダムなかたち存在しているわけではあるまい。

タロイモの*kaate*などのように、人びとが高く評価し、また実際に多くの人が栽培するものほど、多数に分類され、また深いレベルまで分類がおこなわれており、そのもっとも下位のレベルでは、一部の部位の色彩の差異のみによっていることをさきに述べた。これは、そうした対象に対し、人びとが高い関心を払い、微細な差異まで弁別していることを示している。

しかしそれだけでなく、人びとがそうして熱心に見つめる植物に、突然変異などによる形態の変化が見つかった場合、彼らはそれを他と別のものとして区別し、保護・維持してきたことが、彼らの現在のふるまいから大いに考えられる³⁶⁾。そのような積み重ねが、人びとが高い価値をおく植物ほど形態の変異が多く集積するという状況をもたらし、それを彼らの分類体系でも反映して、そうした対象ほど多数に分類されるかたちとなっているのではないだろうか。彼らの分類体系は、人びとと植物との相互的な関わりのなかから生成されてきた多様性の現在のあり方を示しているように思われるのである。

再び表2をみてみたい。塊茎の形が*kaate*型のものは葉裏が白いものが多く、*ch'ulo*型のものは葉柄が黒あるいは緑に白い襟掛けが入って、葉裏が黒あるいは緑であるものが多い。*zirge*型のものは葉が上に反るものが多い。つまり塊茎の形が同じものどうしでは地上部の形態に関しても高い共通性が認められるのである³⁷⁾。したがって、この分類体系は単なる形態分類であるというより、系統的な近縁関係のある程度反映した系統分類であり、いうなれば、各品種の生成・分化してきた道筋を示したものであるとも考えられる。マロの人びとのもつ栽培植物の分類体系は、彼らと植物との相

互的な関わりによって生成されてきた多様性の現在の状況を示しているにとどまらず、その多様性がいかに生成されてきたかという現在に至る過程をも同時に映し出しているといえるのではないだろうか。

人びとと植物との相互的な関わりによって生成されてきた多様性が栽培植物の中に刻み込まれていることは間違いあるまい。本稿ではさらに人びとのもつ分類体系の中にもその鏡像が映し出されている可能性について論じた。人びとと植物との相互的な過程の一端をになうものとして、人びとのもつ分類体系を今後とらえてなおしていくことができるのではないだろうか。

謝 辞

本研究は、文部省科学研究費補助金による国際学術研究「北東アフリカにおける民族の相克と生成に関する実証的研究」(代表者：福井勝義京都大学総合人間学部教授)の成果の一部としてなされたものである。調査の機会を与えてくださった、研究代表者であり、私の指導教官でもある福井勝義教授には、調査の前後を通じ、親身なご指導をいただいた。エチオピア滞在中から私を叱咤激励し、本稿をまとめるにあたっても、私の拙い原稿に何度も快くコメントしてくださったのは、京都大学アフリカ地域研究資料センターの重田眞義助教授である。国立民族学博物館の山本紀夫教授からも本稿について貴重なご助言を賜った。標本の同定に際しては、阪本寧男龍谷大学教授にご協力いただいた。また初めてフィールドワークをおこなおうという私に実践的なアドバイスをして下さったのは、同じ調査隊の栗本英世国立民族学博物館助教授、宮脇幸生大阪府立大学助教授、松田凡京都文教大学講師の各氏である。本稿のもととなった修士論文を作成する時点では、谷泰滋賀県立大学教授、菅原和孝京都大学総合人間学部教授、田中雅一同人文科学研究所助教授をはじめ、私の所属する同大学院人間・環境学研究科文化人類学講座の皆様から、ゼミなどの場で熱心にコメントしていただいた。アフリカ学会をはじめいくつかの研究発表の場でも、多くの方々から有益なご意見を賜った。これらの方々に深く感謝の意を表したい。最後になったが、調査中私を常に暖かく迎え入れてくれたマロの人びとに謝辞を捧げたい。

註

- 1) 同様のことがアイヌの穀物分類に関して報告されている(山田 1986)。すなわちかれらに本来栽培されたことのないイネは*si-amam*(*sisam-amam*)「日本人の・穀物」と呼ばれ、それ以上分類されることはないのに対し、彼らの食生活の根幹をなしていたヒエとアワは*aynu-amam*「人間の・穀物」と呼ばれ、その内部で3つの異なるレベルで類別されており、「包括名*amam*」の分類は、植物の重要度、人びとの関心のあり方などによって部分的に類別化が進行し、分類体系が重層的構造をもちうることを示している」と述べられている(山田 1986: 158)。
- 2) 重田(1995: 144)は「栽培植物の品種、あるいはその基礎となる多様性は、植物が一方的に用意したものではな」く、「ヒトと植物の相利的な共生関係を通して、ドメスティケーション(domestication)が進んでいく過程で成立してきたもの」と主張している。
- 3) 国家気象行政局(National Meteorological Services Agency)で得たデータによれば、マロの東南約30kmに位置するBulqi(高度2,400m)およびSawla(同1,300m)の二地点の年平均最高気温は23.9℃, 30.1℃, 年平均最低気温は14.0℃, 17.4℃で、年平均降水量は1,676mm, 1,286mmである。
- 4) エチオピア南部の諸集団に関する民族学的な調査報告としてドイツのフロベニウス研究所のメンバーによるものがあり、マロの南側および西側に隣接するバスケット(Baskeeto)とディメ(Dime)についての記載はある(Haberland 1959a, 1959b)。しかしそれらもマロについてはほとんど言及していない。近年になってマロの言語に関する研究が始められた(Alemayehu 1993, 1994)。
- 5) 筆者の滞在中におこなわれた国勢調査の結果では、マロ・コザ郡に居住する人口74,922人のうち、18,555人がマロの人口と記載されている(Office of Population and Housing Census Commission 1996)。しかしこれはマロのうち、後述するゴカ(Gok'a)、それもマロ語を常用する地域のゴカのみの人口を数えたものにすぎないと思われる。実際にはゴファ語を現在常用している人びとも、その生活文化はゴファのものと異なっており、自らはマロであるとはっきり自覚している。こうしたことから、マロ・コザ群の人口の大半はマロに含められるべきものと考えられる。
- 6) 人口の大半を占めるゴカとドコが農耕と家畜飼養をおこない、人口的にはごくわずかのオタ・マニ(の女性)およびギタ・マニ(の男性)が土器製作と鍛冶をそれぞれおこなう。このうち、ゴカとドコの間には通婚関係がみられるが、それ以外の通婚はおこなわれな

い。なかでも両職能集団は農耕民のあいだから不浄な存在として賤民視されている。

- 7) 本稿でいう栽培植物とは、その繁殖を人間が管理・介入する植物と定義しておく。つまり人間が種子を播いたり、栄養体を植え付けたりする植物のことである。野生集団から取り出した実生を家の周囲に植え、その後保護をおこなうような場合はしたがって含まれない。ヒマ (*Ricinus communis* L.) は家の周囲でひんぱんに見かけられ、種子の油を明かりに用いたりするが、人々が意図的に栽培しているわけではないのでやはり含めていない。コムギと一緒に一部は播種・収穫される非脱粒性のドクムギ (*Lolium temulentum* L.) および半脱粒性の雑草性エンバク (*Avena abyssinica* Hochst.) は、そのふるまいからは栽培植物と判別しがたいが、人々から排除すべきものとして否定的にとらえられているので同様に含めなかった。また、表1に挙げたものがマロの栽培植物のすべてというわけではないことも断っておきたい。海拔1,000m前後の低地の集落では、それら以外のものも観察されたが、短期間にごく断片的に調べたにすぎないため、ここには記載していない。
- 8) 穀類とイモ類の栽培では、栽培地が異なる (表1の「栽培地」欄参照) など、いくつかの顕著な対照性がみられ、マロの農耕を特徴づける大きな要素となっている。マロの農耕体系全般については、機を改めて報告したい。
- 9) 伊谷 (1977) は Tongue 属の動物分類で、それ以下に分割できない方名を、Tongue 属の動物的世界を構成する基本的要素と考え「方名種」と命名している。また山田 (1984, 1986) は沖縄・八重山地方やアイヌの植物分類を論じるなかで、植物の最小の集合を表す名称として「個別名」を定義し、それらを包摂する名称である「包括名」と区別している。マロにおいても、野生植物の分類についてみる限り、「方名種」あるいは「個別名」という定義は有効であるように思われる。しかし栽培植物についてみた場合、後述するように分類の深化するレベルが対象によって異なっているという事実があり、その最小のまとまりを同列に扱うことは問題を生じかねない。そのため、ここでは人びとが実際の栽培という行為のなかで区別しているまとまりを分類の基準として用いることにした。
- 10) 例外的に「モロコシ」に対応する民俗種名は存在しない。ガイツアではもっとも主要な品種である *daats'a* という名称で代用し、シャーシャでは *baha* というより広い意味範囲をもつ語 (後述) で指示している。
- 11) これらの同定は阪本寧男龍谷大学教授 (京都大学名誉教授) によるものである。
- 12) エンマーコムギとそれ以外のコムギとの名称による区別はマロに限ったものではない。エチオピアの諸社会で広く認められるものであることを福井 (1971) は報告している。
- 13) アリでも栽培エンセーテと野生エンセーテは名称で区別されている。前者は *agemi*、後者は *gela* とよばれる (重田 1988)。
- 14) エンセーテは十年ほど生長した後、開花・結実して枯れる一稔性の植物である。河辺林などに生育する野生エンセーテは通常利用されることはないのに対し、家の周囲で育てられる栽培エンセーテは成熟前にその塊茎を掘り出し食用や植え付け用に用いる (他の利用法は後述)。しかし、家の周囲の栽培エンセーテでもまれに放置された結果、開花・結実することがあり、その種子から芽が出ると、人びとは「野生エンセーテに戻った (*?ejo maak'eeza*)」などという。
- 15) 水タバコに用いるパイプ *gaay* を産出するヒョウタンを、*bach'e* に含める意見と、*hale*, *bach'e* のいずれでもないとし、別のものとしてとらえる意見とがあり、一致をみなかった。調査をおこなった二つの集落では *gaay* を産出するヒョウタンは栽培されておらず、今後その栽培をおこなっているより低地の集落での調査によって明らかにしていきたい。
- 16) アムハラ語で「花」という意味の *abāba* という語から借入・転訛されたものと思われる。
- 17) *abebe* と一括される植物間でも栽培がまったく同一におこなわれているわけではない。種を播くものも株分けをするものも含まれている。これらの植物はすべてマロに伝わってまだ新しいもので、*abebe* という民俗種が存在するというより、個々の植物に対する民俗種名が付与されていない状況にあるのかもしれない。個々の民俗種名が欠如しているため、それを包括する名称 (*abebe*) によって代用されているのだと考えられる。
- 18) *kattsä* にはより一般的な「食物」という意味がある。そのため潜在的な食物である野生の食用キノコや野生のヤムイモ *woor boye* 等も含められることがある。その逆に空腹を満たすのに十分な食物を提供しうるイモ類や穀類、マメ類などに狭く限定して考えられることもある。また後述する蒸し煮の料理法もこの同じ語が用いられる。このように *kattsä* とはきわめて多義的かつ重要な語であり、マロの料理法や食物分類を扱う別の機会により詳しく論じることにはしたい。
- 19) マロにジャガイモとサツマイモが伝わったのは人びとの記憶でたどられるほどの近年のことである。したがってそれらの伝わる以前には、*malo dono* と現在よばれているオロモボテが *dono* とよばれる唯一の対象であったと考えられる。なお、エチオピアの主要な民族集団であるアムハラもこれら三つのイモ類を総称し

- てdinichとよぶなど、同様の名称区分がエチオピアの他の民族社会でも存在することが報告されている(福井1993)。
- 20) ただし栽培植物の生長段階区分や植物部位についての名称を細かく比較検討するなかから、語彙には表れていないカテゴリーがみいだされてくる可能性は残されている。
- 21) マロ語で「品種」に相当する語は*kocche*, *?omma*などである。これらはいずれも人間集団の「クラン」を意味する語でもある。アムハラ語由来の*aynetto* (「種類」の意味) という言葉も普通に用いられる。いずれにせよ、本稿で論ずる「品種」とはマロの人びとによる栽培植物の分類のひとつのまとまりであって、育種学など近代科学の分野で取り扱われる「品種」と対比させていうならば、「民俗品種」(folk variety) とでもよぶべきものである。ただし簡便を期すため、以下では単に「品種」と表記する。
- 22) バーリンら (Berlin 1976, 1992; Berlin et al. 1973) は各植物の文化的重要性 (cultural significance) を、人間の管理あるいは相互作用の度合いであるとし、その大きいものから「栽培 (cultivated) 種」、「保護 (protected) 種」、「有用 (significant) 種」、「無用 (unimportant) 種」の4つに分類し、人間との関わり合いの大きい前者のものほど、より細かく分類される傾向があることを指摘している。
- 23) 同じく多数の品種が弁別されている穀類の分類については、ある品種のものが別の品種のものになるという転化が一部で想定されるなど、独自に考察しなければならぬ点も多いため、別稿で考察することとした。
- 24) 収穫作業をのぞけば農作業をおこなうのはほぼ男性に限られており、栽培植物についての深い知識をもっている人も男性であることが多いため、今回の調査では主に男性から聞き取った。
- 25) タロイモの品種についてはその名称と実物との対応に重複がおこっていることが多分に推定され、それを避けるためここでは複数人からあげられた品種名のみを扱った。一人だけからあげられた品種名も加えればその数は当然増大する。
- 26) 蒸し煮 (*kattsa*) とは、数センチ角の大きさに切ったタロイモをつばいばいに詰めて、水を加え、エンセーテの葉で栓をしたものを、火にかけてゆで、水がなくなる頃に火からおろして、逆さ向きにつばをおいて蒸らすという料理法である。タロイモに限らず、エンセーテやヤムイモなどイモ類全般についておこなわれる最も一般的な料理法である。
- 27) 意味をもっているのは、*kaate* (「王」の意)、*boots-boyna* (「白い・タロイモ」)、*uma-shuccha* (「オモ川(の)・石」) で、部分的に有意味なのは*budo-gabidda* (「灰」・不明) である。このうち、*kaate* はイモが大きく太く生育し、かれらがもっとも高い評価を与えている品種である。*boots-boyna* は全体的に白っぽい特徴がみられる。
- 28) *kal'ate* はヤギの色・模様を表す名称のひとつで、前半身が黒く、後半身が白いことをいう。
- 29) *kaate* はその名称 (「王」の意味) が示すように、タロイモ全体をおさめる (*kaatiza*) ものだといわれ、もっとも高く評価されている。
- 30) エンセーテの栽培利用に関しては重田 (1988) がアリの事例をもとに詳細な報告をおこなっており、マロでもアリと共通する点が多いため、ここではその概略を述べるにとどめる。
- 31) エンセーテの品種名で複合的構成をもつものは、他に *dada-maccho*, *kaate-gad'int*s, *dangarsa-shuuk'ule* がある。*worja-maccho* と *dada-maccho* は名称の上からは *maccho* という品種があつて、その下位区分として2つが区別されているようにみえる。しかし、*maccho* という品種名がいわれたことはなく、また *worja-maccho* と *dada-maccho* とは外観が大きく異なっていて、人々にも両者に関連性が認識されているわけでないため、別々の品種として扱った。
- 32) その意味で表4では(b)'とした。なお、*piile* は *boots-boyna* というタロイモの品種の別名である。
- 33) 「利用レベル」と「半利用レベル」の違いは、民俗種では別のものどうしは常に区別して栽培・調理されるのに対し、塊茎の形・味覚による区分はときおり用いられるにすぎずたいい場合は区別されていないという点である。「言及レベル」とは人びとが最も普通に言及するものであることを、「認識レベル」とは個々人の認識に近いかたちで分類されたものであることを表す。
- 34) 松井 (1996) は「実用主義」と「主知主義」という二元論をのりこえる視点として、人々と対象との相互の関係を重視した「対話主義」を提唱している。
- 35) 重田 (1988) は人間の様々な選択行為、ならびに野生集団を儀礼的に保護するという文化的装置、および植物の側での種子繁殖による栽培集団と野生集団の遺伝的交流や芽状突然変異 (枝変わり) 等が相互に作用しあうことによって、アリの人びとが栽培するエンセーテの多様性が維持・生成されていると主張している。
- 36) Boster (1985) は、ペルー北部のアグアルナ (Aguaruna) のもつキャッサバの品種は耕作者に知覚的に弁別される特性に対して選択が働いてきたことを主張し、栽培植物が部位の着色など非適応的な分類特性で大きな変異を示すのは品種を識別し維持しようとする人びとの努力があったからだとしている。

37) 表 2 に挙げた形態以外にも、生長の早さ、葉と葉柄の割合、葉柄の太さなどに関して、同じタイプのものでは共通性が高い。また、*kaate*, *ch'ulo*, *zirge* の各品種の下位分類のなかではさらに共通性が高いことはいうまでもない。

引用文献

- Abebe, A., 1993. "Ometo dialect survey — a pilot survey report," *S.L.L.E. Linguistic Report* 4: 1-9, Addis Ababa.
- Abebe, A., 1994. "Malo: An unknown Ometo language," in H. G. Marcus ed. *New Trends in Ethiopian Studies: Papers of the 12th International Conference of Ethiopian Studies*, Vol. 1, pp.1064-1084. The Red Sea Press.
- Berlin, B., 1976. "The concept of rank in ethnobiological classification: some evidence from Aguaruna folk botany," *American Ethnologist* 3: 381-399.
- Berlin, B., 1992. *Ethnobiological Classification: Principles of Categorization of Plants and Animals in Traditional Societies*. Princeton: Princeton University Press.
- Berlin, B., D. E. Breedlove and P. H. Raven, 1973. "General principles of classification and nomenclature in folk biology," *American Anthropologist* 75: 214-242.
- Boster, J. S., 1985. "Selection for perceptual distinctiveness: Evidence from Aguaruna cultivars of *Manihot esculenta*," *Economic Botany* 39(3): 310-325.
- Friis, I., 1992. *Forests and Forest Trees of Northeast Africa*. Kew: Royal Botanic Gardens.
- 福井勝義, 1971. 「エチオピアの栽培植物の呼称とその史的考察—雑穀類をめぐって」『季刊人類学』2(1): 3-86.
- 福井勝義, 1993. 「エチオピアにおける根菜類の呼称とその史的考察」佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社, pp. 187-214.
- Haberland, E., 1959a. "Die Basketto und verwandte Stämme," in Ad. E. Jensen ed. *Altvöcker Süd-Äthiopiens*, Band I, pp.189-226. W. Kohlhammer Verlag.
- Haberland, E., 1959b. "Die Dime," in Ad. E. Jensen ed. *Altvöcker Süd-Äthiopiens*, Band I, pp.227-263. W. Kohlhammer Verlag.
- 堀田満ほか編, 1989. 『世界有用植物事典』平凡社.
- 伊谷純一郎, 1977. 「トングウェ動物誌」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣, pp.441-537.
- 松井健, 1996. 「ものと名前的人类学」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 158-174.
- Office of Population and Housing Census Commission, 1996. *The 1994 Population and Housing Census of Ethiopia: Results for Southern Nations, Nationalities and Peoples, Region, Part I*. Addis Ababa: Central Statistical Authority.
- 重田眞義, 1988. 「ヒト—植物関係の実相: エチオピア西南部オモ系農耕民アリのエンセーテ栽培と利用」『季刊人類学』19(2): 191-281.
- 重田眞義, 1995. 「品種の創出と維持をめぐるヒト—植物関係」福井勝義編『講座地球に生きる 第四巻 自然と人間の共生』雄山閣, pp. 143-164.
- 山田孝子, 1984. 「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7: 25-235.
- 山田孝子, 1986. 「アイヌの植物分類体系」『民族学研究』51(2): 141-167.